

追録

異形交尾
快樂地獄

成人向

ある秋晴れの日
祓いの依頼を受け一般の民家が
所有する蔵へと赴くことになった。

依頼の内容からして
危険は無いと判断し
見習いとして付けている
娘二人も同行させたのだが……

現実
は異な
った。

蔵の中は女の胎を借りて繁殖する
低級ではあるが些か厄介な
異形の群れで満たされていたのだ。

彼女がそのことに
気づいたのは
娘三人が蔵の中へ
足を踏み入れて
しまった後のこと
だった。

「後は私に任せて
あなたたちは早く
逃げなさい。」

そう言っ
て娘たちを
屋内から放り出し
彼女は内側から結界を張った。

彼女は扉を閉じる前に
泣きじゃくる下の娘を
安心させるため
今出来る精一杯の
笑顔を作って見せた。

この日に限っては
異形と戦闘になることを
想定していなかったため
退魔符の枚数も残り少ない。

つまり
元より異形を倒しきれず
算段など無かったが……

状況から
「こうすること」が
最善だと判断し
覚悟を決めた。

窮地に追いやられた
自分を鼓舞するが如く
退魔師としての意地と
母の威厳を込めて
蠢く異形に向けて彼女は
言い放った。

『かかって来なさい!』

結局——奮戦虚しく退魔符もすぐに底をつき彼女は異形に絡め取られてしまった。

一瞬で身体の自由を封じられ手際よく衣類を剥ぎ取られる。

あとは予想通りの「準備」が肅々と進められた。

この屋内には異形が分泌する媚毒が揮発し充滿しつつある。

身体感覚が
変わって来ていることに
彼女は気づいた。

呼吸すること
に肺と脳へ成分が巡り
じきに全ての感覚が快楽で
埋め尽くされるのだろう。

文献で読んだ通りだったが
彼女自身が体験すること
になるとは夢にも思わなかった
——今日までは。

これから行われることを
はつきりと意識させるが如く
下腹部に繁殖器が当てがわれる。

あまりにも異質な肉塊に
彼女といえども弱気な感情が溢れた。

繁殖器をチラつかせ

彼女の注意を引いたところに
背後から「ずるん」と下着の中へ
イボ付き触手が侵入する。

完璧な不意打ちだった。

イボ付き触手はそのまま
びつちりと彼女の股間に
貼り付きながら前後運動
を始める。

それも一定の速さではなく
緩急をつけて角度を変え
時には焦らすように優しく
股間をなぞりあげる。

異形の知能が
如何程かは定かでないが

触手の所作からは
明らかに彼女を弄ぼうという
意思を感じ取れた。

ガツチリと脚を押さえつけられ
逃げることを許されない体勢で
じつくり念入りに
股間をブラッシングされる。

イボ触手が分泌する粘液には
当然の如く媚毒作用が有り
ひと擦りごとに秘部全体の
感度が高められていく。

異形は彼女の反応を見て「擦り方」を
学んでいるようでイボ触手の運動は
よりの確な角度、速さ、粘度になり
彼女の股間をねつとりと擦り上げる。

この先味わう異形の責め苦を想像する
には十分すぎる体験をしたところで
彼女はついに股間ブラッシングで絶頂を
刻まれる。

夫にも聞かせたことのないような
情けない声が漏れ出たところで
彼女の長い快樂地獄が始まった。

次に触手の標的になったのは彼女の豊満な胸だった。

異形の体にある大きな唇が開かれるとそこは溢れんばかりの媚毒粘液で満たされていた。

彼女が思考を回す間もなく胸を拘束していた触手が解け彼女の両乳頭は異形の大唇にむしゃぶりつかれた。

当然両乳首はたっぷり媚毒に浸されることになる。

瞬間——乳頭を通して脳に強烈な快楽電流が流れ込む。

人間本来の性感帯を直接媚毒の原液につけまれたのだ。あまりの快感に呼吸が荒くなる。

底から幾つかの小触手が伸び出てくるとそれぞれの乳頭を摘みあげ小刻みに擦り始めた。

先ほどの股間イボ触手ブラッシングで嫌というほど思い知らされた卓越した触手の愛撫。もはや声を我慢することは不可能だった。

どれだけ拒絶の言葉を吐き出しても触手の動きは止まるはずもなく彼女は生まれて初めて乳首で絶頂する感覚を味わった。

ものの数分で夫との営みで漏れるような甘い吐息が回からこぼれ落ちる。

ガク

ガク

ガク

一度絶頂したからといって
そこで触手の動きが止まる
はずもなく——媚毒の粘液を
潤滑油にして彼女の両乳首を
徹底的に磨き上げた。

結果——彼女の乳頭と乳輪は
パンパンに膨れ上がり
もはや空気に触れているだけで
甘イキしてしまうほどに
感度が高められてしまった。

異形が母体へ徹底的に快楽を
与え続けることには理由がある。

異形の繁殖には膨大な霊力が必要となるが
母体が幸福感を得ている時が最も霊力を
奪いやすい状況になるという。

そういった理由から
異形は母体を快楽漬けにし
出産するときの苦痛ですらも
余すことなく快楽へと変換し
食欲に霊力を吸い尽くす。

彼女は助けが来るまでの7日間
女盛りの熟れた肉体に人間が
一生で味わうはずもない量の
快楽を叩き込まれることになる。

母体の下ごしらえを充分に
終えた異形は満を持して
交尾に向けた準備を始める。

異形のソレは彼女の眼前で
より最もらしい凶悪な形へと
姿を変えていく。

人のソレと大きさが全く
異なるのは言わずもがなだが
カリ首が多層に連なっており
更に重なるの隙間からあの粘液が
絶え間なく滴り落ちている。

変態を終えた繁殖器が
ついに股座にあてがわれる。

これまでの
執拗な媚毒快樂責めで
受け入れ準備は否が応でも
整ってしまった。

拒絶の言葉が喉元まで
登りつめたが……
彼女は覚悟し——飲み込んだ。

異形の繁殖器は
すんなりと彼女の
股座を貫いた。

散々昂らされたカラダは
一切の苦痛も感じることなく
強烈な快楽だけが彼女を支配した。

異形の連続カリ首が
腔内の隅々までねっとり
ほじくり返していく。

「腰使い」という形容が
正しいのかはわからないが
まるで熟練の竿師の如く
腰さばきで彼女の泣き所を
的確に引っ搔いていく。

羞恥心を煽る
大股開きの
体勢で拘束され
途切れることなく
抽送運動が続く。

なんでもそれはあー

人ならざるイチモツの
人ならざる動きが生み出す
人知を超えた快樂が
彼女の脳を焼いていく。

彼女の留守になつてた両乳に
ヒトデ型の触手が食らいつく。
乱暴に揉みしだかれ
粒突起がびつしりの舌触手で
媚毒粘液をまぶされながら
両乳首をじゃぶりまわされる。

極上の乳快樂に
腹の底から出た低い嬌声も
最後は鼻にかかったような
声にもならない音になつて
かき消えた。

絶え間無く分泌される
媚毒につつまれた
多層カリ首に狂わせられる。

向きを変え角度を変え
膈内を絶え間なく
徹底的にほじくり
回され続ける……

抽送一掻き毎に
先ほどまでの
絶頂で刻まれた
快楽とは比較に
ならないほどの
エクスタシーが
雪崩れ込む。

揮発した媚毒の影響で
呼吸すら彼女の快楽中枢を
刺激する——喘ぎ声を漏らせば
声帯の震えで——鼓膜の振動で
甘い刺激が襲ってくる。

快楽で快楽を上塗り
される快楽地獄。

そして——とうとう
その時が訪れた。



射精と同時に強烈な快楽を
脳髓に叩き込まれた彼女は
しばらく絶頂の波から
抜け出すことが出来なかった。

繁殖液を出されてしまった絶望と
至高の快楽の狭間で彼女は
泣きながら絶頂に達し続けた。

異形の繁殖液は
母体の排卵を強制的に誘発し
確実に受胎させる。

即ち——彼女が異形の
母になった瞬間だった。

異形は彼女を孕ませたことを
鼓舞するかの如く生殖器を
彼女の顔前に突き出した。

そして——それに呼応するように
ぬらぬらと別の個体の繁殖器が
彼女を取り囲み始める。

異形の母親に休みなど
ないことを知り
切れ目なくあの快楽を
味わい続けるのだと悟り
恐怖した。

彼女は朦朧する意識の中
心の中で呟いた。

『あなた…助けて…』





結局——彼女が器としての
役目を終えるまで蔵の扉が
開くことは無かった。

彼女が施した結界は
頑強かつ完璧であった為
外側からこじ開けられる者は
誰もいなかったのである……

彼女の霊力を異形が全て
貪り尽くしたと同時に
ようやく結界が解けた。

彼女が有能な
退魔師であったが故の
悲劇だった……



彼女は7日間で合計108体の
異形を産み落とした。
そのうち90体は
既に結界の力で死滅していた。

残りの18体のうち9体は
彼女の救出する際に助けに入った
退魔師たちにその場で滅せられたが
あとの9体は逃亡
闇の中へと消えていった……

救助に入った夫と対面した
彼女の表情は恐怖でも憔悴でもなく
恍惚と呼ぶのが相応しい様子だった。

結んでいた髪は解けて乱れ
彼女の表情と合わさって
妖しげな艶を演出している。

これは彼女がこの7日間
切れ目のない快楽に
どっぷり漬け込まれていた
ことを物語っていた。

彼女の乳輪は色濃く変色し
両乳首はパンパンに膨れ上がっている。
乳房自体の大きさも一回りほど大きく
なっているだろうか……
異形たちのおもちゃにされ
徹底的に遊び尽くされたことは
目で見て明らかだった。

以上が須美平様より
ご提出いただいた
手記及び救助班の証言より
作成した回顧録になります

内容
相違ありません
でしょうか？

ええ…
概ね

7日間すべてが
記載されてる
わけでは無いのね

はい——今回は
ここまでです

より詳細な記録は
順を追ってまとめていく
ことになります

ですので
引き続き
ご協力のほど
よろしく願ひ
いたします

……
わかったわ

それでは

本日の施術準備が
整いましたので
お部屋にお入りください

施術師二名
治癒に向けて
精一杯のお力添えを
させていただきます

御巫須美乎 ミカナギスミカ

35歳

代々退魔業を営む御巫家の長女。

家族構成は
婿養子の夫38歳
14歳と9歳の娘が2人。

天性の才能と、努力で
培った腕前を持つ歴戦の
退魔師ではあるが、今回は
数が多すぎた上
想定外の邂逅による
装備不十分が敗因であった。

【後日談】

彼女は順調に回復し
半年後には普通の生活に
戻ることができた。
ただ、家族、特に娘たちには
悟られないように気丈に
振る舞っているが
あの7日間の出来事は
彼女の心とカラダに
大きな爪痕を残してる。

週毎の決まった夜更けになると
彼女は退魔師の総本部へ
出かけていく。
そこで心とカラダの治療を
受けているのだという。
彼女が家に帰るのは決まって
翌朝になるそうだ。



娘2人

2人の出番があるとすれば須美乎本編から10年後の話
とかになるかと

IFで描いたイラストをファンサイトの有料記事に置いて
ますのでよろしければチェックしてみてください

PIXIV FANBOX

Fantia



14歳



9歳



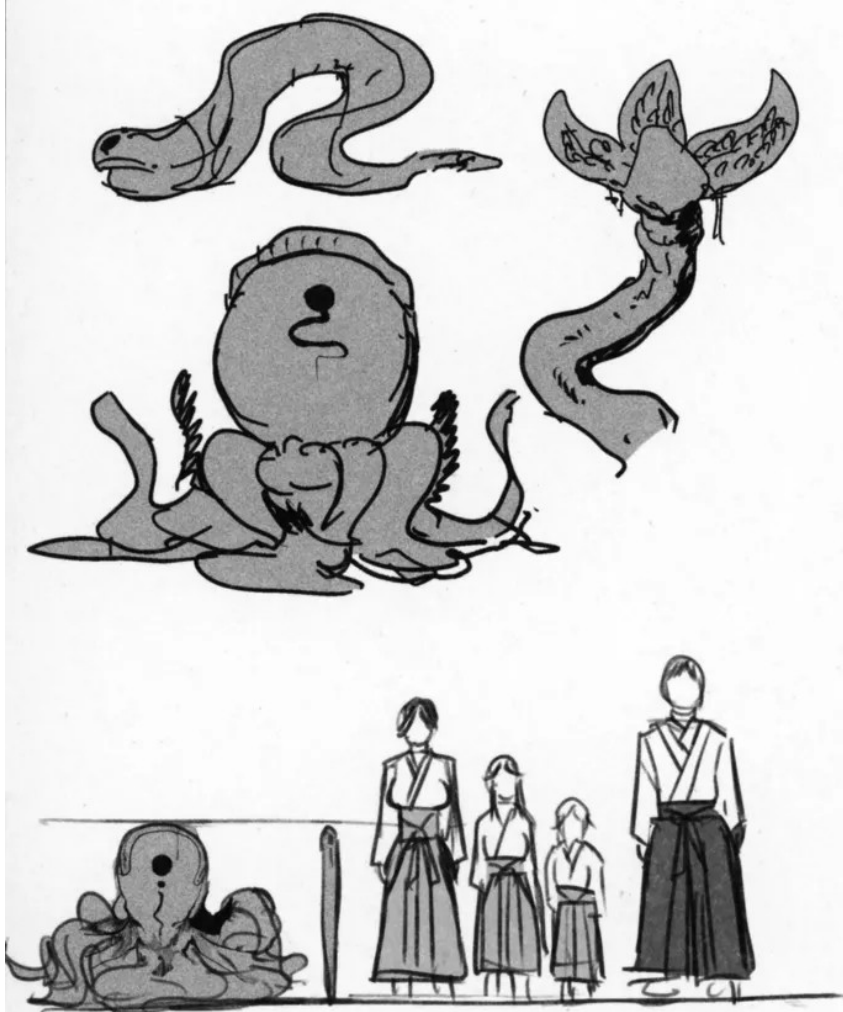
異形一孕魔蟲ハラムシ

女の胎を借りて繁殖を行う異形の一種。

幼体はうなぎのような形をしているが、成体になるとタコのように複数の足を持つ形へと変態する。複数ある足は伸縮自在であり、徒党を組んで母体となる獲物に絡みつく。

体にある大きな唇のようなものの内部には繁殖に使用するための強力な媚毒を常に分泌している。また、繁殖器や女体の快感を昂らせる様々な触手に関してもこの内部に収納されている。

媚毒は女を籠絡するための秘薬の原料としても重宝されており、近年では営利目的で家畜として飼われているケースも報告され始めている。異形の畜産はもちろん違法であるため、人目につかない山奥の廃屋などで行われるのだとか。



成体 幼体 女 娘 男

あとがき

本作は2019年の11月のコミティア(5年前!)で頒布した「異形交尾快樂地獄」に加筆修正を加え新規8ページを追加したりマスター作品です。今後シリーズとして展開するにあたりスタートの襟元は正しておきたかったのです。捕らわれた7日間で起きたことについてはファンサイトで順次公開予定の「回顧録」として須美乎の治療の 部始終や須美乎のその後と娘たちの活躍を描く10年後の御巫家などやりたいことは尽きません

しかし
久しぶりに触手を描いて
特に表紙を描いている時に思いましたが
これは

大変

奥付

※18歳未満の購入閲覧を禁じます。
また、次の全ての行為を禁じます。
生成AIの学習素材とすること。
無断転載、複製、無断アップロード。

発行 アイソカーフ／アレクロ
発行日 2024年11月17日 初版
印刷所 フロス様

Mail lealorg@yahoo.co.jp

Bluesky @lealorg bsky social
Misskey @lealorg@misskey.io

Pixiv ID 763059
X(Twitter) ID @lealorg

Bluesky



X



FANZA



追録・異形交尾快樂地獄



アイソカーフ



追録：異形交尾快樂地獄



アイソカーフ